

鯨 研 通 信



第404号

1999年12月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)

◇ 目次 ◇

春から初夏にかけて7E及び8海区におけるミンククジラの分布 (1998年北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査概要)	銭谷亮子 1
反捕鯨主義のまやかしとその罪 (反捕鯨運動家への反論) ダン・グッドマン (著) 飯野靖夫 (訳) 12	
日本鯨類研究所関連トピックス (1999年9月~11月)	15
日本鯨類研究所関連出版物等 (1999年9月~11月)	17
京きな魚 (編集後記)	20
ストランディングレコード	21

春から初夏にかけて7E及び8海区における ミンククジラの分布

(1998年北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査概要)

銭谷亮子 (日本鯨類研究所)

1. はじめに

北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査 (JARNP調査) は、1994年の予備調査を経て、1995年から本格的な調査を開始し、1998年で5回目の調査となる。本調査は、北西北太平洋に分布するミンククジラの系群構造を明らかにすることと、同海域におけるミンククジラの摂餌生態を明らかにするという二つの目的から実施している。本調査の経緯及び目的の詳細については、これまでの『鯨研通信』(藤瀬, 1995, 1996, 1997; 石川, 1998) に報告されているのでそれらを、また、本年調査の経緯及び目的の詳細については第51回IWC/SCに提出した1998年の航海報告 (Zenitani *et al.*, 1999) を参照し

て頂きたい。

1997年までに実施した4回の調査結果や採集されたミンククジラの遺伝学的な解析結果及び生物学的特性値などの比較から、以下の点が明らかになっている。

(1) 盛夏には、太平洋側の沿岸域から沖合域 (7、8及び9海区) まで広くオホーツク海-西太平洋系群 (O系群) が分布し、仮想された沖合系群 (W系群) の存在を示唆する結果は得られなかった (Goto and Pastene, 1997a, 1997b; Wada, 1996; Fujise *et al.*, 1997)。

(2) 5月から6月 (春から初夏) においても8及び9海区にはO系群が分布しており、W系群の存在を示唆する結果は得られなかった (Goto and Pastene, 1998; Fujise *et al.*, 1998)。

(3)4月に黄海-東シナ海-日本海系群(J系群)とO系群の混在が認められていた北海道オホーツク海沿岸域(11海区)では、8月においても混在している事が明らかになった(Goto and Pastene, 1997b; Pastene *et al.*, 1998)。

(4)ミンククジラは、沖合域(9海区)では、春から初夏(5月から6月)にはカタクチイワシを、盛夏(7月から9月)にはサンマを主要餌生物としており、また11海区ではオキアミ類を主要餌生物にしているなど海域や時期によって利用している餌生物が異なるなどの摂餌生態も明らかになりつつある(Fujise *et al.*, 1998; Ishikawa *et al.*, 1997)。

本報では、これらの結果を受けて、5月から6月に三陸沖合で実施した1998年のJARPN調査航海の概要について紹介し、本航海で得られた結果について説明する。

2. 1998年調査の目的

対象海域とした7海区東側(7E海区)及び8海区はこれまでに1996年と1997年に調査を行っているが、標本数が十分でなく、特に7E海区では僅か3頭しか採集されていない。また、8海区では1997年に31頭採集されたものの、東経153度30分以東の海域に標本が集中しており、海域全体から標本が採集されていない。このため、ひとつの系統群が日本沿岸から沖合域にかけて分布しているという連続性については十分な証拠が得られていない。そこで、1998年調査では、標本数が不足している7E海区と8海区の西側(東経153度30分まで)に重点を置き、5月から6月(春から初夏)に調査を行って、標本数の確保に重点を置くこととした。さらに、11海区におけるO系群とJ系群の混合の実態をより明らかにするため、少標本である7月に11海区の調査を行うことを計画した。しかしながら、後述したように、7E及び8海区での標本採集が順調に進み、同海域での分布の詳細を明らかにするため、11海区調査については次年度に延期した。

3. 調査概要

調査海域は外国の200海里EEZを除く7E及び8海区を対象とした。1998年調査は、日新丸(7,575 GT)を調査母船として、第2共新丸(361 GT)を目視専門船とした目視調査と、第1京丸(K01:812.08 GT)、第25利丸(T25:739.92 GT)、第18利丸(T18:758.33 GT)を目視採集船とした捕獲調査から成る体制で実施した。

目視及び採集方法はこれまでの調査と同様である(Fujise *et al.*, 1996, 1997; Ishikawa *et al.*, 1997)。詳細については1998年の調査航海報告(Zenitani *et al.*, 1999)やこれまでの『鯨研通信』(藤瀬, 1995, 1996, 1997)を参照して頂きたい。

3.1. 目視調査

目視専門船による目視調査は7E及び8海区全域のミンククジラの分布や資源量に関わる目視データを収集することを主目的とし、さらに引き続いて実施される捕獲調査においても標本が確保できるように、ミンククジラの発見状況や水温分布などの情報を提供することを目的として計画された。航海期間は1998年4月24日から6月23日までの61日間で、調査期間は4月26日から6月21日までの52日間であった。目視調査はさらに通常調査、特別調査の二つの調査に分けて実施した。

通常調査は7E及び8海区におけるミンククジラの分布や資源量に関わる目視データを収集することを目的とした調査である。7E海区及び8海区全域それぞれに南北のジグザグ状のコースを事前に設定し、このコースに沿って北側から南側に調査を実施した。

特別調査はこの時期にミンククジラが分布している水温帯を把握することを目的として実施した。

通常調査及び特別調査の調査期間、調査日数及び調査海区は表1に、また、調査コースは図1に示した。海区別の探索距離は表2に示した。

7E海区で、5群5頭のミンククジラを一次発見し、8海区では10群12頭(一次発見:8群9頭、二次発見:2群3頭)のミンククジラを発見した(表3)。これらの発見位置は図2に示したが、北緯40度から42度の緯度帯に集中しており、発見時の表面水温を見ると、7E海区

表1. 目視専門船による目視調査の調査期間、調査日数及び調査海域

	調査期間	調査日数	調査海域	調査コース
通常調査	1998/04/26 ~ 1998/04/27	2	7 E	南北のジグザグコース
	1998/04/29 ~ 1998/05/07	9	7 E	南北のジグザグコース
	1998/05/18 ~ 1998/06/21	35	8	南北のジグザグコース
特別調査	1998/04/28	1	7 E 北緯38度 ~ 北緯40度	
	1998/05/08 ~ 1998/05/12	5	7 E 北緯38度 ~ 北緯40度	

表2. 1998年調査における探索距離

海区	目視専門船	3隻の目視採集船			合計
		BCモード*	BSモード**	BCモードの割合	
7E	1,258.9	1,783.4	1,241.0	(59.0)	3,024.4
8	1,503.6	439.9	1,480.2	(22.9)	1,920.1
合計	2,762.5	2,223.3	2,721.2	(45.0)	4,944.5

* : 通常の目視調査条件下 (視界2マイル以上、風力4以下) での調査。

** : 通常の目視条件下以外の海況でミンククジラの採集が可能と判断される海況下での調査。

表3. 1998年JARPN調査の目視専門船によって発見された鯨種と海区別発見タイプ別群頭数 (群/頭数)

鯨種	7E海区		8海区		合計	
	一次発見	二次発見	一次発見	二次発見	一次発見	二次発見
	群 / 頭数	群 / 頭数	群 / 頭数	群 / 頭数	群 / 頭数	群 / 頭数
ミンククジラ	5 / 5		8 / 9	2 / 3	13 / 14	2 / 3
ミンククジラらしい			3 / 3		3 / 3	
イワシクジラ			4 / 4	3 / 4	4 / 4	3 / 4
ナガスクジラ		1 / 1	4 / 4		4 / 4	1 / 1
シロナガスクジラ			1 / 2		1 / 2	
ザトウクジラ				1 / 1		1 / 1
セミクジラ	2 / 3				2 / 3	
マッコウクジラ	20 / 31	3 / 8	10 / 24	5 / 5	30 / 55	8 / 13
ハナゴンドウ			1 / 36		1 / 36	
シャチ	1 / 1		3 / 7	1 / 5	4 / 8	1 / 5
コブクジラ			1 / 5		1 / 5	
種不明アカボウクジラ科鯨類	4 / 11	2 / 3	4 / 6		8 / 17	2 / 3
イシイルカ型イシイルカ	2 / 28		24 / 149	5 / 29	26 / 177	5 / 29
リクゼン型イシイルカ	3 / 14				3 / 14	
型不明イシイルカ	18 / 84	2 / 15	37 / 166	6 / 23	55 / 250	8 / 38
カマイルカ	1 / 5	2 / 40	5 / 33	2 / 10	6 / 38	4 / 50
マイルカ	1 / 130			5 / 189	1 / 130	5 / 189
種不明大型鯨類	2 / 2		4 / 4		6 / 6	
種不明小型鯨類	3 / 5	2 / 6	3 / 3	1 / 4	6 / 8	3 / 10
種不明イルカ類	16 / 87	4 / 17	18 / 141	7 / 170	34 / 228	11 / 187
種不明鯨類	6 / 8	1 / 3	4 / 5		10 / 13	1 / 3

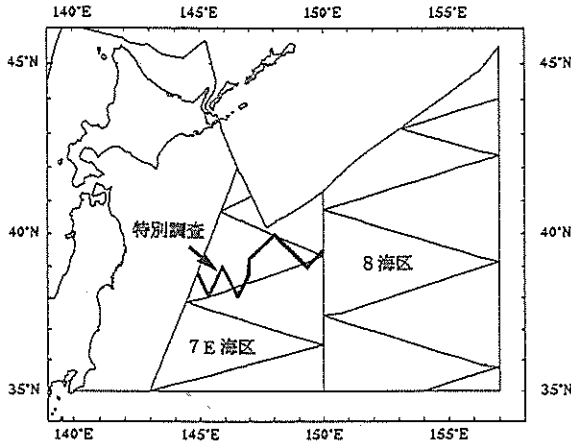


図 1. 1998年JARPN調査における目視専門船の調査コース。

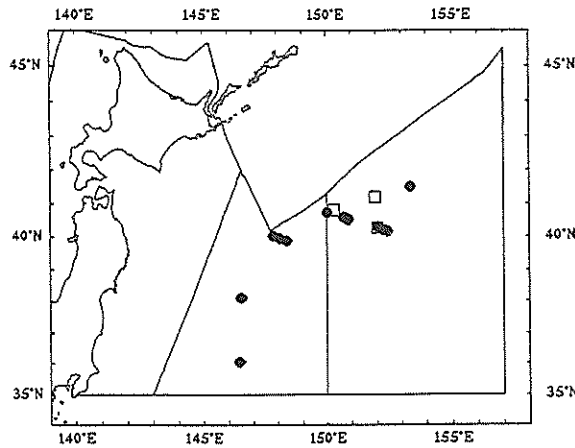


図 2. 目視専門船によるミンククジラ及び
‘ミンククジラらしい’の発見位置。
ミンククジラ : ●一次発見
 : ○二次発見
‘ミンククジラらしい’ : ■一次発見
 : □二次発見

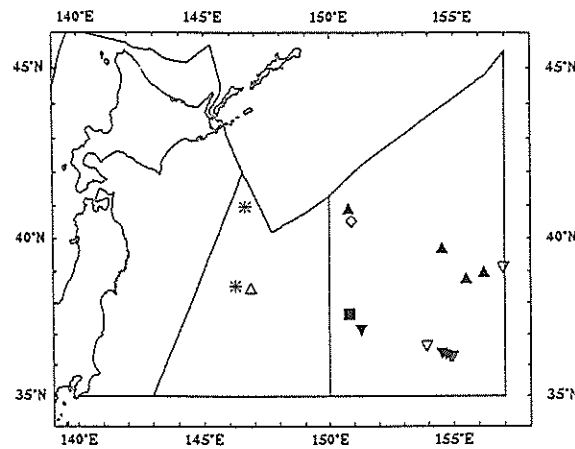


図 3. 目視専門船によって発見された大型ヒゲクジラ類。
シロナガスクジラ : ■一次発見
セミクジラ : *一次発見
ザトウクジラ : ◇二次発見
ナガスクジラ : ▲一次発見
 : △二次発見
イワシクジラ : ▼一次発見
 : ▽二次発見

では12~13°C (範囲: 11.9~16.2°C)、8海区では11~12°C (範囲: 10.1~14.7°C) の水温帯に発見が集中していた。

調査期間中に発見した海区別・鯨種別の発見群頭数は表3に示した。最も発見が多かった鯨種はイシイルカで、次いでマッコウクジラであった。また、大型ヒゲクジラの発見位置は図3に示したが、セミクジラとナガスクジラが7E海区で、イワシクジラ、ナガスクジラ、シロナガスクジラ、ザトウクジラが8海区で発見された。

3.2. 捕獲調査

捕獲調査の航海期間は1998年5月1日から6月19日までの50日間であった。捕獲調査は5月2日から開始し、6月13日に目標標本数の100頭に達したため、以後は3隻の目視採集船が分担して目視調査のみを行い、6月15日に捕獲調査を終了した。今年の捕獲調査は事前調査、通常調査、特別調査の3つの調査に分けて実施した。

事前調査はこれまでの調査におけるミンククジラの発見が12~13°Cの表面水温帯に集中していたことから (Fujise *et al.*, 1996, 1997; Ishikawa *et al.*, 1997)、この水温を中心にした調査コースを設定し、今年のミンククジラが分布する水温帯の確認を行った。目視専門船から報告されたミンククジラの発見位置や発見時の表面水温、及び調査海域の水温分布等を考慮して、調査海域を限定し、3隻の目視採集船で分担して調査を行った。

通常調査は標本が特定の海域に集中せず、調査海域全域から採集することを目的に実施した。春から初夏の成熟雌個体や北上の遅い集団からの標本の採集に努めるため、7E及び8海区西側の全域を対象として、南北のジグザグ状のコースを設定し、北側から調査を実施した。目標標本数の100頭に達した6月13日以後は、未調査コース部分を3隻の目視採集船が分担して目視調査のみを実施した。

特別調査は7E及び8海区西側における標本を確保するために実施した。それまでの調査から得られたミンククジラの発見位置や発見時の表面水温、及び調査海域の水温分布等の情報を

もとに、ミンククジラの密度が高いと予想される海域を特定し、その海域に新たな調査コースを設定した。

これらの事前調査、通常調査及び特別調査の調査期間、調査日数及び調査海区は表4に、調査コースは図4に示した。

3隻の目視採集船で探索したモード別探索距離は表2に示しており、7E海区では探索距離の59%がBCモードで調査できたが、8海区では僅か23%しかできなかった。調査期間中に7E海区では、94群100頭 (一次発見: 47群48頭、二次発見: 47群52頭) のミンククジラを発見し、8海区西側では、61群65頭 (一次発見: 22群23頭、二次発見: 39群42頭) のミンククジラを発見した (表5)。図5にミンククジラの発見位置を示したが、7E海区及び8海区西側共に北緯39度から北緯41度の緯度帯に集中しており、ミンククジラ発見時の表面水温を見ると、7E海区を調査した5月には8~9°C (範囲: 6.5~15.0°C)、8海区を調査した6月には11°C (範囲: 7.4~15.6°C) の水温帯に発見が集中していた。

調査期間中に発見された海区別・鯨種別の発見群頭数を表5に示した。大型ヒゲクジラの発見位置を図6に示したが発見は少なく、イワシクジラ、ザトウクジラ、セミクジラが、北緯39度から北緯41度の緯度帯で発見されただけであった。また、北緯39度19分、東経145度42分においてニタリクジラ1群1頭が、薄い噴気 (ブロー) を手がかりとして二次発見された。発見時の表面水温は8.3°Cであり、通常ニタリクジラが発見される水温帯 (18~26°C) よりもかなり低い水域での発見であった。ニタリクジラが発見された5月9日はミンククジラの密度の高かった海域を対象として採集活動を行っており、表面水温は7.9~8.8°Cであった。また、この日の調査では大型鯨類の発見はこのニタリクジラ以外に一次、二次発見ともに無かった。同海域ではミンククジラの発見が続いており、発見時の表面水温は7.9~8.8°Cとかなり低く、ニタリクジラが分布している水温とは考えにくい状況下、0.5マイル以内で、このクジラの暗灰色の体色、鎌のような背ビレ、そして明暗の色素パターン等から目視採集船はこの個体をミンククジラであると判断し、採集するといった誤

表4. 3隻の目視採集船による捕獲調査の調査期間、調査日数及び調査海域

	調査期間	調査日数	調査海域	調査コース
事前調査	1998/05/02 ~ 1998/05/06	5	7 E 北緯37度 ~ 北緯40度	東西のジグザグコース
通常調査	1998/05/18 ~ 1998/05/27	10	7 E+8	南北のジグザグコース
	1998/06/14 ~ 1998/06/15	2	7 E+8	南北のジグザグコース
特別調査	1998/05/07 ~ 1998/05/17	11	7 E 北緯39度 ~ 北緯41度	
	1998/05/28 ~ 1998/06/13	17	8 北緯39度 ~ 北緯41度	

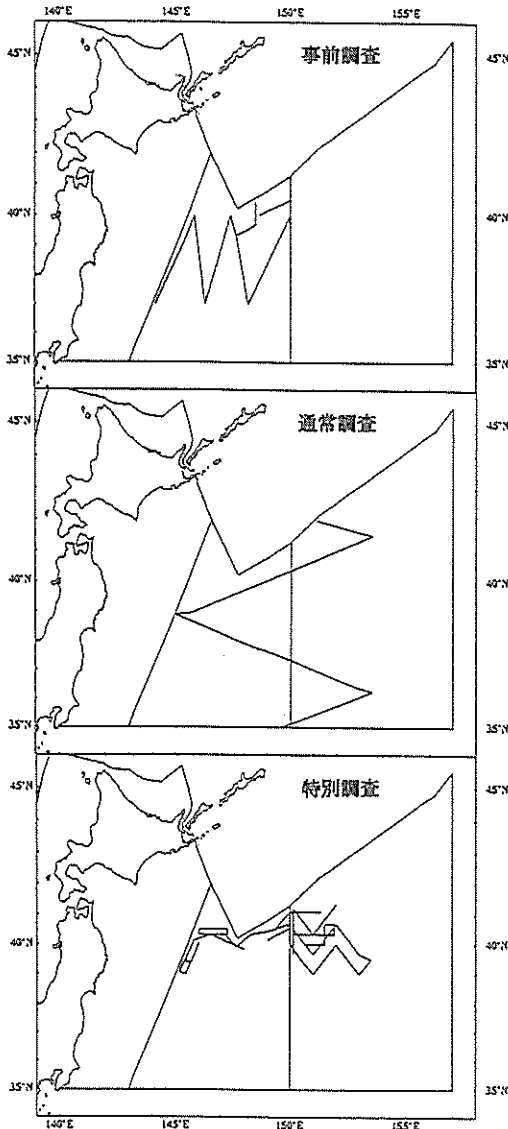


図4. 1998年JARPN調査における3隻の目視採集船の調査コース。

認捕獲が起こった。採集したこの個体は母船上でニタリクジラであることが確認され、詳細な生物調査を実施した。体長8.52m、体重4.66tの未成熟雌個体であった。また後の実験室でのmtDNA解析の結果、この個体が沖合系のニタリクジラであることが確認されている（後藤、私信）。生物調査が終了した後、鯨体は通常の手順に従って処理し、帰港後これら全ての副産物は水産庁の監督の下で焼却処分した。なお、本件に関しては水産庁からIWCに報告されている。

4. 7 E及び8海区におけるミンククジラの分布の特徴

3隻の目視採集船により、発見したミンククジラ155群165頭の内、119群126頭を対象として採集活動を行い、100頭を採集した（図7）。7 E海区では64群67頭を採集対象として56頭を、また8海区では55群59頭を採集対象として44頭を採集した。採集したミンククジラは全て母船に引き揚げ、生物調査を実施した。7 E海区で採集したミンククジラは雄49頭、雌7頭、8海区は雄40頭、雌4頭であった。

1998年調査の調査結果及びミンククジラから得られた性状態、体長、胎児、寄生虫及び胃内容物等の情報を用いた予備的解析から、以下の点が明らかとなった。

ミンククジラの連続分布

同海域は1996年にも調査を行っているが、ミンククジラの来遊が当初予想していた時期よりも早かったため、結果として僅か17頭の標本しか採集されなかった（Fujise et al., 1997）。それまでの調査から、ミンククジラの発見が12～

表 4. 3隻の目視採集船による捕獲調査の調査期間、調査日数及び調査海域

	調査期間	調査日数	調査海域	調査コース
事前調査	1998/05/02 ~ 1998/05/06	5	7 E 北緯37度 ~ 北緯40度	東西のジグザグコース
通常調査	1998/05/18 ~ 1998/05/27	10	7 E+8	南北のジグザグコース
	1998/06/14 ~ 1998/06/15	2	7 E+8	南北のジグザグコース
特別調査	1998/05/07 ~ 1998/05/17	11	7 E 北緯39度 ~ 北緯41度	
	1998/05/28 ~ 1998/06/13	17	8 北緯39度 ~ 北緯41度	

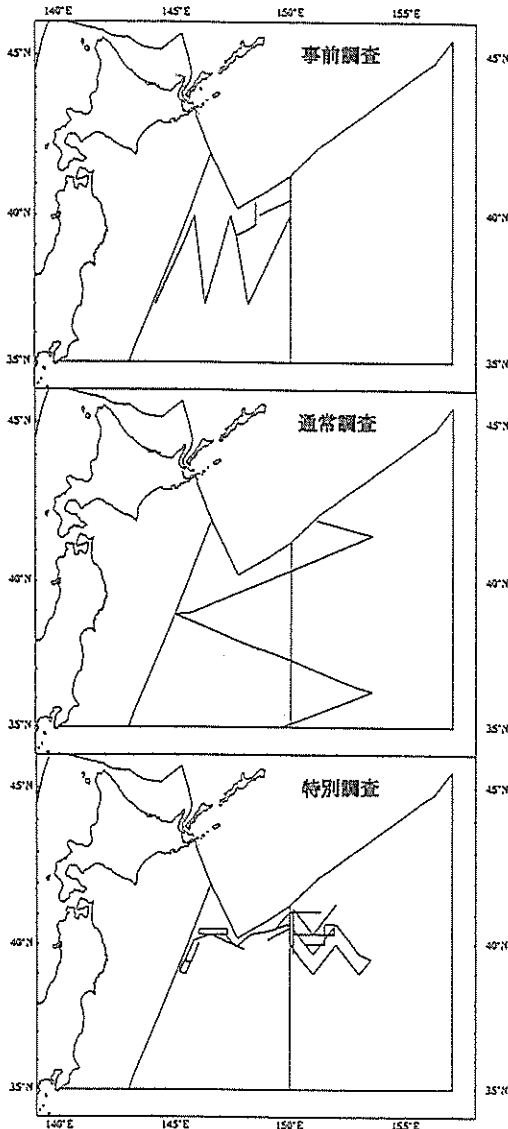


図 4. 1998年JARPN調査における3隻の目視採集船の調査コース。

認捕獲が起こった。採集したこの個体は母船上でニタリクジラであることが確認され、詳細な生物調査を実施した。体長8.52m、体重4.66tの未成熟雌個体であった。また後の実験室でのmtDNA解析の結果、この個体が沖合系のニタリクジラであることが確認されている（後藤、私信）。生物調査が終了した後、鯨体は通常の手順に従って処理し、帰港後これら全ての副産物は水産庁の監督の下で焼却処分した。なお、本件に関しては水産庁からIWCに報告されている。

4. 7 E及び8海区におけるミンククジラの分布の特徴

3隻の目視採集船により、発見したミンククジラ155群165頭の内、119群126頭を対象として採集活動を行い、100頭を採集した（図7）。7 E海区では64群67頭を採集対象として56頭を、また8海区では55群59頭を採集対象として44頭を採集した。採集したミンククジラは全て母船に引き揚げ、生物調査を実施した。7 E海区で採集したミンククジラは雄49頭、雌7頭、8海区は雄40頭、雌4頭であった。

1998年調査の調査結果及びミンククジラから得られた性状態、体長、胎児、寄生虫及び胃内容物等の情報を用いた予備的解析から、以下の点が明らかとなった。

ミンククジラの連続分布

同海域は1996年にも調査を行っているが、ミンククジラの来遊が当初予想していた時期よりも早かったため、結果として僅か17頭の標本しか採集されなかった（Fujise et al., 1997）。それまでの調査から、ミンククジラの発見が12～

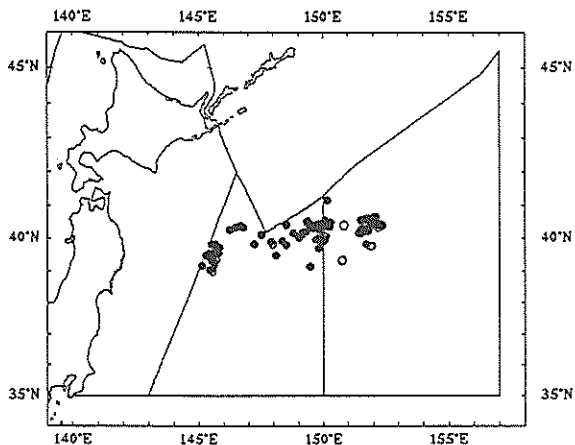


図5. 3隻の目視採集船によるミンククジラの発見位置。

ミンククジラ : ●一次発見
: ○二次発見

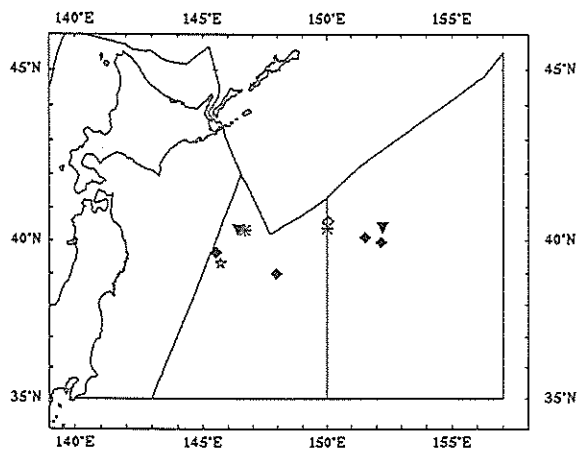


図6. 3隻の目視採集船によって発見された大型ヒゲクジラ類。

セミクジラ : *一次発見
ザトウクジラ : ◆一次発見
: ◇二次発見
イワシクジラ : ▼一次発見
ニタリクジラ : ☆二次発見

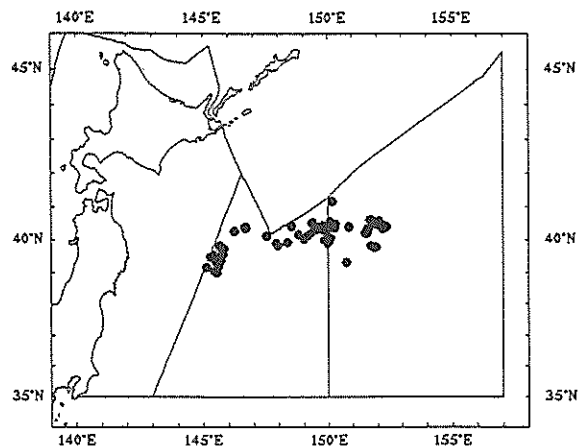


図7. 3隻の目視採集船によって採集されたミンククジラの発見位置。

表5. 1998年JARPN調査の3隻の標本採集船によって発見された鯨種と海区別発見タイプ別群頭数(群/頭数)

鯨種	7E海区		8海区		合計	
	一次発見	二次発見	一次発見	二次発見	一次発見	二次発見
	群/頭数	群/頭数	群/頭数	群/頭数	群/頭数	群/頭数
ミンククジラ	47/48	47/52 ¹⁾	22/23	39/42 ²⁾	69/71	86/94
ミンククジラらしい	5/5	9/9 ³⁾	1/1	10/10 ⁴⁾	6/6	19/19
ニタリクジラ		1/1				1/1
イワシクジラ	1/1		1/1		2/2	
ザトウクジラ	3/3		2/2	1/1	5/5	1/1
セミクジラ	2/3				2/3	
マッコウクジラ	56/184	13/20	22/34	8/10	78/218	21/30
ハナゴンドウ	1/10	1/6	1/50		2/60	1/6
シャチ	13/42	5/19	12/45	8/38	25/87	13/57
種不明オウギハクジラ属鯨類	6/8	1/2	2/2		8/10	1/2
種不明トックリクジラ属鯨類	1/4				1/4	
種不明アカボウクジラ科鯨類	14/32	2/2	10/20	3/5	24/52	5/7
イシイルカ型イシイルカ	1/5		3/24		4/29	
リクゼン型イシイルカ	2/7				2/7	
型不明イシイルカ	7/37		2/12		9/49	
種不明ゴンドウクジラ類	1/3				1/3	
種不明大型鯨類	1/1	1/1	2/2	1/1	3/3	2/2
種不明イルカ類	5/24				5/24	
種不明鯨類	32/32	7/7	21/21	12/12	53/53	19/19

1) 母船で二次発見された3群3頭を含む。

2) 母船で二次発見された3群3頭を含む。

3) 母船で二次発見された1群1頭を含む。

4) 母船で二次発見された3群3頭を含む。

13°Cの表面水温帯に集中していること、また、これよりも低い水温に分布していることがわかってきた (Fujise *et al.*, 1996)。しかしながら、調査海域の北緯40度以南の表面水温はすでに15~22°Cまで上昇しており、ミンククジラの発見はなかった。さらに12~13°Cの水温帯はすでに調査海域の北方に移動していたことから、ミンククジラも北方に移動してしまったと考えられ、7E及び8海区でのミンククジラの分布は明らかにできなかった。さらにこの年の調査期間の68%にあたる46日間を7E及び8海区調査に費やしたものの、海霧や時化の悪天候の影響もあり、思うような調査はできなかった (Fujise *et al.*, 1997)。1997年にも同海域で調査を行ったが (Ishikawa *et al.*, 1997)、悪天候のため7E海区では1個体採集されただけであった。また、8海区において31個体採集されたものの、同海域の東側に標本が集中しており、8海区全域を反映するような標本採集とはならなかった。過去2回の調査を行ったものの、7E

及び8海区の調査海域全域からは十分な標本数が確保できず、日本沿岸から沖合域にかけてひとつの系統群が分布するという日本の主張が懸念されていた。しかしながら、1998年調査により、5月から6月には7E海区及び8海区西側においてもミンククジラが分布することが明らかとなり、懸案事項であったミンククジラの分布については、日本沿岸から沖合域にまで連続して分布していることが本年の調査から明確になった。

成熟雄の卓越

1998年調査で採集されたミンククジラの性比及び性状態組成(表6)を見ると、7E及び8海区ともに雄の割合は高く(7E海区:87.5%、8海区:90.9%)、雄の成熟率もこれまでと同様に高かった(7E海区:83.7%、8海区:87.5%)。一方雌は、両海区共に標本数が少なく、その成熟率は7E海区が42.9%、8海区が50.0%であった。以上の結果とこれまでの調査

表6. 1996年から1998年調査において7E海区及び8海区で採集されたミンククジラの性状態組成

海区	年度	時期	標本数	雄			雌			性比 (雄%)	成熟率 (%)		妊娠率 (%)
				未成熟	成熟	合計	未成熟	成熟*	妊娠		合計	雄	
7E	1996	7/07	1				1	[1]	1		100.0	100.0	
		~7/15						(100.0)					
	1997	6/22	2	1	1	2				100.0	50.0		
		~6/27		(50.0)	(50.0)								
1998	5/05	56	8	41	49	4	3	[2]	7	87.5	83.7	42.9	66.7
	~5/28		(14.3)	(73.2)		(7.1)	(5.4)						
8	1996	7/16	16	2	14	16				100.0	87.5		
		~8/13		(12.5)	(87.5)								
	1997	6/28	31	1	29	30	1	[1]	1	96.8	96.7	100.0	100.0
		~7/14		(3.2)	(93.5)		(3.2)						
1998	5/24	44	5	35	40	2	2	[2]	4	90.9	87.5	50.0	100.0
	~6/15		(11.4)	(79.5)		(4.5)	(4.5)						

*: 妊娠雌を含む。

結果 (Fujise *et al.*, 1995, 1996, 1997, 1998; Ishikawa *et al.*, 1997) から、以下のようなミンククジラの分布状況が明らかとなった。

(1) 7E海区にも春から初夏にはミンククジラが来遊しており、これまでに調査した沖合域の8及び9海区と同様に、5月には雄個体、特に成熟雄が卓越して分布し、数は少ないが成熟雌や未成熟個体も来遊していた。

(2) 8海区では、これまで盛夏に調査した年と同様に、雄個体、特に成熟雄が卓越して分布しており、さらに数は少ないが成熟雌や未成熟個体も来遊していた。また、盛夏に比べると未成熟個体の割合が高かった。

(3) これまで調査してきた調査海域には、7E海区から9海区にわたって、5月から6月には成熟雌や未成熟個体も分布しており、これらは盛夏には調査海域外に移動していると考えられた。

W系群の存在は認められず

1998年調査で得られた胎児体長、体長、異常精巢、寄生虫及び胃内容物の情報を用いた予備的解析から以下のような結果が得られ、これまでの調査結果 (Fujise *et al.*, 1995, 1996, 1997, 1998; Ishikawa *et al.*, 1997) と同様に海域間の明確な違いは検出されず、W系群の存在を示唆する結果は得られなかった。

(1) 1998年調査で採集された成熟雌個体のうち、7E海区では2頭が、8海区では2頭が妊娠しており、これらの妊娠個体が有していた4

頭の胎児の体長データを過去のデータと比較したところ、これまでの捕獲調査で採集された胎児と同様にO系群と同じ受胎時期を有しているものと考えられた (図8)。

(2) 一部の雄ミンククジラの精巢及び精巢上体組織に異常が認められることはこれまでも報告されているが (Fujise *et al.*, 1996, 1997, 1998; Ishikawa *et al.*, 1997)、1998年調査においても、成熟個体のみならず精巢の一方もしくは両方に同様の異常が観察され、その出現率は、7E海区が14.6%、8海区が20.0%であり、海区の違いは認められなかった。

(3) 雄個体の体長組成は7E及び8海区ともに7.6mにピークを持ち、比較的小さな体長の個体も採集されており、両海区とも類似した組成を示した。雌個体は7E及び8海区ともに標本数が少ないため明確ではないが、大型から小型までの広い範囲の個体が採集された (図9)。

(4) 観察された外部及び内部寄生虫はこれまでの調査結果と同様であり、外部寄生虫ではペンネラ、蔓脚類、クジラジラミが、内部寄生虫では線虫、鉤頭虫類、糸虫類、吸虫類が観察された。ペンネラは7E及び8海区共に80%以上のミンククジラに寄生していた。また、7E及び8海区共に、ほとんどのミンククジラの胃から線虫 (*Anisakis simplex*) が (97.7~100%)、また全ての個体の小腸から鉤頭虫類が認められ、吸虫類も採集個体のほぼ65~75%に寄生していた。外部及び内部寄生虫ともに海区による寄生率の違いは認められなかった。

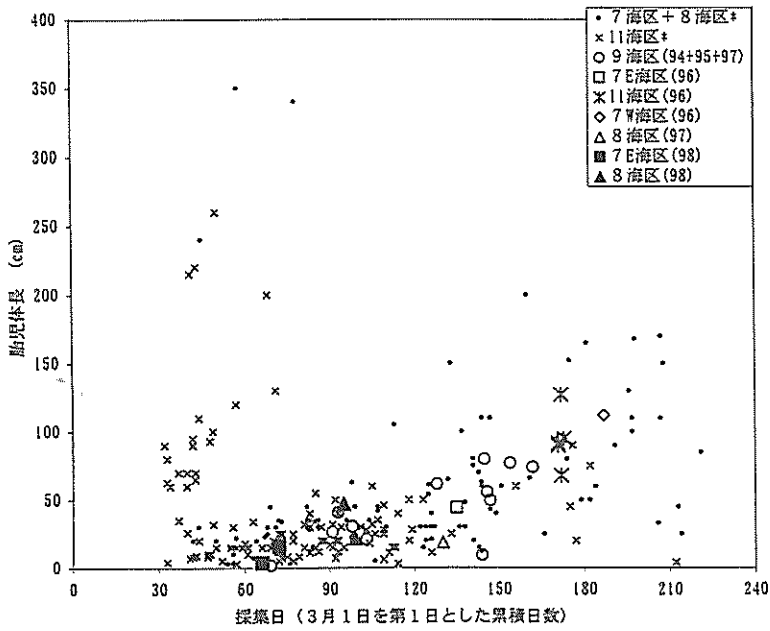


図8. 胎児が採集された日と胎児体長との関係。
Kato(1992)のデータに1994年から1998年までのJARPN調査で得られた胎児体長データを加えた。

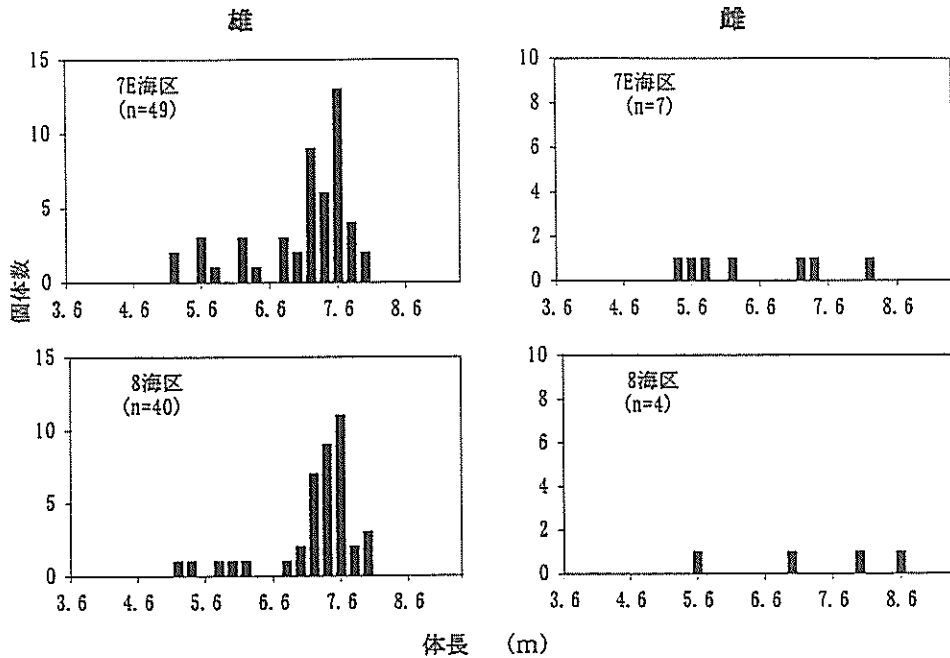


図9. 1998年JARPN調査で採集されたミンククジラの海区別、性別体長組成。

カタクチイワシからサンマへ

1998年調査で採集されたミンククジラの胃内容物調査からはツノナシオキアミ、サンマ、カタクチイワシ、サケ科魚類が確認されたが、7 E海区及び8海区共に採集したミンククジラのほとんど(94.3~97.7%)はカタクチイワシを主要餌生物としていた。

これまでの沖合域(8及び9海区)における盛夏の調査から、ミンククジラの主要餌生物はサンマであること、またサンマ漁場とミンククジラ分布域との間に密接な関係があり、ミンククジラの主な分布域の表面水温は12~13°Cであることが示唆された(Fujise *et al.*, 1995, 1996, 1997)。しかしながら、1997年に実施した春から初夏(5月から6月中旬)の9海区調査では、主要餌生物はカタクチイワシであり(Ishikawa *et al.*, 1997)、ミンククジラの主要餌生物は季節によって異なり、春から初夏にかけてはカタクチイワシを餌とし、また、盛夏にはサンマに移行するのではないかと考えられた。5月から6月にかけて実施した1998年調査では7 E、8海区ともに主要餌生物はカタクチイワシであり、同海区においても9海区と同様に、春から初夏にかけてはカタクチイワシを主要餌生物としていたことが明らかとなった。

さらにミンククジラの発見は7 E海区では8~9°C、8海区では11°Cの表面水温帯に集中しており、これまでの調査における発見時の表面水温に比べると低く、ミンククジラは表面水温にはあまり左右されず、カタクチイワシの豊富な海域を追って移動していると考えられた。以上のことから、北西北太平洋に來遊するミンククジラは単にサンマだけを利用しているのではなく、海域や時期によって利用する餌生物を変えるなど柔軟な摂餌能力を有していることが、さらに明確になった。

5. 謝辞

本調査計画のプロジェクトリーダーである水産庁遠洋水産研究所嶋津靖彦所長に厚く御礼申し上げます。当研究所大隅清治理事長、水産庁中央水産研究所畑中寛所長、水産庁前捕鯨班八木信行班長を始めとする関係者各位に厚く御礼申

し上げる。また、調査船団の調査員並びに乗組員、及び当研究所の職員各位の団結した協力体制により、本調査を実施することができ、調査航海を無事に終えることができた。ここに厚くお礼申し上げます。

6. 引用文献

- 藤瀬良弘. 1995. 北太平洋におけるミンククジラ捕獲調査. 鯨研通信 385: 1-8.
- Fujise, Y., Kishiro, T., Zenitani, R., Matsuoka, K., Kawasaki, M. and Shimamoto, K. 1995. Cruise report of the Japanese whale research program under a special permit for North Pacific minke whales in 1994. Paper SC/47/NP3 presented to the IWC Scientific Committee, May 1995 (unpublished). 29pp.
- 藤瀬良弘. 1996. 1995年に実施した第2回北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査の航海報告. 鯨研通信 390: 1-14.
- Fujise, Y., Iwasaki, T., Zenitani, R., Araki, J., Matsuoka, K., Tamura, T., Aono, S., Yoshida, T., Hidaka, H., Nibe, T. and Tohyama, D. 1996. Cruise report of the Japanese whale research program under a special permit for North Pacific minke whales in 1995 with the results of a preliminary analysis of data collected. Paper SC/48/Np13 presented to the IWC Scientific Committee, June 1996 (unpublished). 39pp.
- 藤瀬良弘. 1997. 1996年北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査とこれまでの調査結果について. 鯨研通信 395: 1-20.
- Fujise, Y., Shimada, H., Zenitani, R., Goto, M., Tamura, T., Lindstrom, U., Uchida, H., Shimamoto, K., Yuzu, S., Kasai, H., Kinoshita, T., Iwata, T. and Tohyama, D. 1997. Cruise report of the 1996 Japanese whale research program under a special permit for North Pacific (1996JARPN) and some preliminary analysis of data collected from 1996 JARPN. Paper SC/50/NP8 presented to the IWC Scientific Committee, September 1997 (unpublished). 38pp.

- Fujise, Y., Zenitani, R. and Kato, H. 1998. An examination of the W-stock hypothesis for North Pacific minke whales with special reference to some biological parameters using data collected from JARPN surveys from 1994 to 1997. Paper SC/50/RMP12 presented to the IWC Scientific Committee, April 1998 (unpublished). 14pp.
- Goto, M. and Pastene, L.A. 1997a. Population structure of western North Pacific minke whale based on an RFLP analysis of mitochondrial DNA control region. *Rep. int. Whal. Commn* 47: 531-537.
- Goto, M. and Pastene, L.A. 1997b. RFLP analysis of the mitochondrial DNA control region in minke whales sampled during the 1996 JARPN. Paper SC/49/NP10 presented to the IWC Scientific Committee, September 1997 (unpublished). 10pp.
- Goto, M. and Pastene, L.A. 1998. Population structure in the North Pacific minke whale as revealed by RFLP and sequencing analysis of mtDNA control region. Paper SC/50/RMP7 presented to the IWC Scientific Committee, April 1998 (unpublished). 15pp.
- 石川創. 1998. 1997年度北西北太平洋鯨類捕獲調査航海記. 鯨研通信 399: 6-14.
- Ishikawa, H., Yuzu, S., Shimamoto, K., Bando, T., Ohshima, K., Kasai, H., Kinoshita, Y., Iwakami, H., Nibe, T., Hosoyama, T., Kuramochi, T., Numano, K. and Miyamoto, M. 1997. Cruise report of the Japanese whale research program under a special permit in the western North Pacific (JARPN) in 1997. Paper SC/49/NP9 presented to the IWC Scientific Committee, September 1997 (unpublished). 28pp.
- Kato, H. 1992. Body length, reproduction and stock separation of minke whales off Northern Japan. *Rep. int. Whal. Commn* 42:443-453.
- Pastene, L.A., Goto, M. and Kishino, H. 1998. An estimate of the mixing proportion of 'J' and 'O' stocks minke whales in sub-area 11 based on mitochondrial DNA haplotype data. *Rep. int. Whal. Commn* 48: 471-474.
- Wada, S. 1996. Results of allozyme analysis on minke whale samples from JARPN in 1995. Paper SC/48/NP21 presented to the IWC Scientific Committee, June 1996 (unpublished). 4pp.
- Zenitani, R., Fujise, Y., Matsuoka, K., Tamura, T., Bando, T., Ichihashi, H., Shimokawa, T., Krasnenko, A. S., Taguchi, F., Kinoshita, T., Mori, M., Watanabe, M., Ichinomiya, D., Nakamura, M., Sakai, K., Matsuzaka, K., Kamei, H. and Tohyama, D. 1999. Cruise report of the Japanese Whale Research Program under a Special Permit in the North Pacific in 1998. Paper SC/51/RMP7 presented to the IWC Scientific Committee, May 1999 (unpublished). 20pp.

反捕鯨主義のまやかしとその罪

(反捕鯨運動家への反論) *1

ダン・グッドマン著、飯野靖夫(日本鯨類研究所)訳

1. 機能不全のIWC

シドニー・J. ホルト*2の主張に反して、国連海洋法条約(UNCLOS)は捕鯨管理や鯨類資源

保全の責任を国際捕鯨委員会(IWC)に委ねてはいない。実際にUNCLOSの条文は、国際捕鯨取締条約(ICRW)やIWCにはまったく言及していない。UNCLOSは排他的経済水域制度を確立して、沿岸国が自国200海里水域内の海産哺乳動物に対し主権的権利を有することを認め、同時に公海に対しては17世紀以来保持されてきた(捕鯨を含む)漁業の自由が適用されるとしている(その国が加盟している他の国際取極めに従うという条件付きだが)。世界の国家の大多数はICRWやその他の捕鯨規制に関する協定に参加していないので、鯨類の保存・利用に関して多くの国には慣習法やUNCLOSに代表される成文国際法が適用される。

ところでUNCLOS第65条によると、各国は鯨類の保存、管理及び研究のために「適当な国際機関を通じて活動」しなければならない。ここでは「機関」に複数形が用いられており、単数形ではないことに注意してもらいたい。ホルト他の反捕鯨論者は、この第65条を根拠に、IWCこそが鯨類の保存・管理に責任がある機関だと主張しているが、これに対しては以下の点が銘記されるべきであろう。第一に第65条は国際機関の管轄権や権限を定める規定ではないことであり、第二にこの条文は、各国がIWCと協力しなければならないとは書いていないことである。同様に1992年の国連環境開発会議が採択したアジェンダ21の第17章においても、捕鯨に関してIWCが「唯一責任を有する機関である」というホルトの見解を支持していない。事実、

この第17章ではUNCLOS第65条をそのまま引用して、各国は「鯨類資源」に関するIWCの保存及び管理の責任と、IWC科学小委員会による研究作業を「認識する」と述べているだけである。

ホルトのこうしたでたらめな主張は、「誤魔化しであり、まやかしであり、環境団体特有の態度」^{*2}と評されたグリーンピース・インターナショナル前会長の言説と明らかに同質のものである。環境団体は70年代初期からこうした手を使い、捕鯨問題での世論や政府の政策を思い通りに操作してきた。彼らの反捕鯨キャンペーンは一般市民からの何百万ドルという寄付を呼び込むことに成功したが、クジラのことで環境団体から流布され、広く一般に信じられていることの多くは真実ではない。また政府でさえも、さまざまな研究によって沿岸共同体の文化的、社会経済的必要性や食料としての需要が明らかになったにも拘わらず、環境団体からの圧力のためにそれを顧みない姿勢を取るようになり、またICRWの目的・趣旨である、鯨類資源の持続的利用を図るというICRW締約国としての法的義務を無視するようになってしまい、その代償として、IWCの国際機関としての信頼性や科学面での信頼性が著しく損なわれてしまった。実際のところ、ノルウェーの商業捕鯨や日本の捕獲調査を含め、現在の捕鯨のほとんどはICRWに基づく規制措置が適用されない^{*3}ところで行われており、IWCの存在意義はますます失われつつある。ホルト自身、今後海洋からの

*1 (訳者注記) 本稿は、Dan Goodman, Letter to the Editor, *Marine Pollution Bulletin*, 40(1) (掲載予定) の邦訳。Sidney J. Holt, Whaling and International Law and Order, *Marine Pollution Bulletin*, 38(7)への反論として執筆されたもの。邦訳に当たっては、同誌の出版元であるElsevier Science Ltd.の許可を得た。なお本稿のタイトルと文中の見出しは訳者の責任で付したものである。

なお、ホルトによる原論文は、UNCLOSやアジェンダ21第17章(海洋生物資源の保存・管理を扱う)を採用し、IWCこそが唯一捕鯨管理と鯨類保存に責任を持つ国際機関であると主張し、また、科学的根拠に基づく国際法上の権利・義務に則った健全な鯨類資源管理を目指す動向、すなわち日本の鯨類捕獲調査やノルウェーの商業捕鯨、CITESにおける鯨類ダウンリスティングの試み、更には北大西洋海産哺乳動物委員会(NAMMCO)といった新たな地域的鯨類資源管理の枠組みづくりなどについて批判をしている。

*2 シドニー・ホルト博士は英国人。海洋生物学者で資源動態学の専門家。70年代半ば以降、反捕鯨運動の旗手となる。IWCの決定(1960年)で南極海の主要鯨類資源評価のために設置された「三人委員会」(-1964)のメンバー。IWCには70年代からFAOを代表して出席、80年からは79年に加盟したセイシェル代表団に加わる。同国はIWCでのモラトリアム採択、CITESでのミンククジラ等の附属書Iへの掲載では重要な役割を果たした。グリーンピース英国、国際動物福祉基金(IFAW)での勤務経歴がある。

*3 Pete Wilkinson, The world needs more than protests. *Nature*, 396, 10 December 1998.

食料供給を確保するためには「管理、保存及び調査のための有効な国際機関」が必要だとしているが、IWCはこれから違さがるばかりである。

2. 科学に基づいた管理措置こそ必要

世界の水産資源管理の改善は焦眉の急であり、世界漁業の現状への懸念が高まっている。来世紀に向けてますます増加する世界人口の食料需要を賄うために漁業を含む食料生産力を如何に確保するかという問題が議論されなければならない。漁業管理改善の一環としてFAOが漁船数ないし漁獲努力量の30%削減を求めている。また、包括的生態系管理ないし複数種管理アプローチで資源管理に臨む必要性が徐々に認識されつつある。そのため感情的理由に基づく鯨類絶対保護論はまったく不適切である。そうではなく、年間に5億トンにも上る海産資源が鯨類に食べられていて、すなわち鯨類は世界中の商業的海洋漁業による漁獲の3倍から6倍もの水産資源を食べているということこそ認識されるべきである。

ホルトは、2000年4月に開催予定の「絶滅のおそれのある野生動植物種の国際取引に関する国際条約(CITES)」締約国会議で、いくつかの鯨種について附属書I（絶滅のおそれがあり、一切の商業取引が禁止）から附属書II（絶滅のおそれはないが、取引が規制されなければそうなる可能性がある）に降格（ダウンリスティング）させる提案を日本とノルウェーがする模様であるとしている。IWCの捕鯨規制に関してICRWが一定の基準を示しているように、CITESも種を附属書に掲載するための独自の基準を有している。事実を述べれば、ミンクジラ（黄海・東シナ海・日本海系統群と呼ばれる資源を除く）、ニタリクジラ、コクジラの北太平洋東側系統群を含むいくつかの鯨種は附属書Iに記載するための生物学的基準を満たして

いない。さらに、CITESは附属書改訂の際に考慮すべき予防的措置を定めているが、これら鯨種についてはそうした予防的措置を考慮しても附属書Iに掲載することが適切ではないと考えられる。商業捕鯨モラトリウムが施行されている間、CITESがすべての鯨種を附属書Iに留めておくべきであるとIWCは求めている。しかしノルウェーと日本によるダウンリスティング提案をCITES締約国が採択すれば、それこそが適切な資源管理の寄与することは明らかである。科学ではなく感情に基づいた決定をしているためにIWCは機能不全に陥っているが、CITESが同じ轍を踏まないことを願うばかりである。

1960年代から1970年代にIWCで起こった出来事を根拠に、ホルトは「IWCが持続可能性と予防という原則を精力的に適用しようとしたという点で右に出るものがない機関だ」と称讃しているが、彼はIWC内での出来事についての記述を1980年で終わらせている。この1980年こそ、IWCが絶対保護主義に流れ、持続可能性と予防という原則を無視するようになった時期なのである。1982年に採択された商業捕鯨モラトリウムも、1994年に採択された南大洋サンクチュアリー（鯨類保護区）も資源の持続的利用原則を反映したのではなく、予防的アプローチの合理的定義とも一切関係がない。いずれも、本委員会もとの科学小委員会から資源保存の目的にとってこれらの措置が必要であるとの勧告を得ないままに採択されたものである。その上、ICRWは、IWCによる規制措置は「条約の目的を達成するために必要なものでなければならず、科学的認定に基づくものでなければならず、かつクジラ製品の消費者及び捕鯨産業の利害を考慮に入れたものでなければならぬ」と規定しているが、上記の二つの決定はこうした条約が定める要件に反して採択されている。南大洋サンクチュアリー設置を記すIWC規定の文言は、近年のIWCでの決定がどのような形で行われているかがすぐに分かる格好の例である。そ

*4 ノルウェーはICRW第5条3項に従い商業捕鯨モラトリウムに異議を申し立てているため、モラトリウムに拘束されない。したがってノルウェーの商業捕鯨は国際法上、合法的である。また日本が実施している鯨類捕獲調査は、ICRW第8条により「この条約の規定にかかわらず」締約国が発する許可のもとで実施できると認められており、これも国際法上合法である。ICRW非加盟国による捕鯨活動がICRWの適用を受けないことはもちろんである。

の部分抜き出してみるとこうなる：「…この禁止はこのサンクチュアリーにおけるヒゲクジラ及びハクジラ資源の保存状況に拘わらず適用される。…」これが持続可能性や予防の原則、科学的助言に基づいて資源管理を行うという原則を反映したものとは言えない。

またホルトは、読者に以下の重要な三つの情報を与えていない。(i) ICRWに明示された条約の目的は、「捕鯨産業の秩序ある発展を可能にするために鯨類を適切に保存すること」であること。(ii) IWCの科学小委員会は、いくつかの鯨類資源は（モラトリアムやサンクチュアリーの有無に拘わらず）持続的に捕獲することが出来ると合意している。(iii) IWCの科学小委員会は資源へのリスクを十分織り込んだ捕獲枠計算方式（改訂管理方式あるいはRMPと呼ばれる）を開発・テスト済みで、IWC本委員会はこれを採用している。このRMPは、資源豊度評価に偏りがあつたり、系統群境界の仮定に誤りがあつたり、また環境変動によって環境が許容する鯨類資源量に変化するという条件下であっても、資源に悪影響が及ぶリスクを排除して安全な捕獲限度を算出することが出来る方式である。科学小委員会において持続的捕獲が可能であると合意された系統群にRMPを適用しても、過去の商業捕鯨で起こったような乱獲につながることはない。RMP適用によって再開される捕鯨は、食料目的に行われる規制された持続可能な捕鯨であり、捕獲対象となるのは例えば科学小委員会で推定資源量が76万頭を越えると合意された南氷洋のミンククジラ資源など、いくつか特定の系統群である。

3. 反捕鯨派は反道徳的

1980年以降、IWC加盟国の数が40にまで達し、その多数派にとっては、そもそもの条約の目的

である鯨類資源の持続的利用は到底受け入れられないものであった。今日のIWCでの多数派はすべての鯨類が商業捕鯨から保護されるべきとの見解を有しているが、これはもちろん条約に反している。一方で日本、ノルウェーといったIWCメンバー国のいくつかは、現在資源量が豊富な鯨類資源について十分な規制下での持続的捕獲を再開したいと考えている。他方でこうしたIWCメンバー国に対して、IWC多数派が脅迫、強制、経済制裁の脅しを使って反捕鯨主義を押し付けている。これがIWCの勢力状況なのである。

締約国の多数派は鯨類管理に関する科学小委員会からの勧告を軽んじ（そのために、1993年、科学小委員会の議長は事務局長への手紙の中で辞職すると述べた）、本委員会及び科学小委員会の作業を意図的に本来の目的から外れた方向に向け、さらに条約目的に反し、慣習国際法に違反するかたちでIWCの設立条約であるICRWを解釈している。環境保全・資源管理問題に関しては国際協力がますます必要とされているが、IWCの出来事はそうした協力にとってとてもよくない先例になっている。ホルトは日本やノルウェーが「IWCの評判を傷つけている」と非難するが、それは筋違いである。両国の振る舞いはIWC締約国としての義務及び国際法に従っており、さらに持続的利用の原則と予防的アプローチに適っている。むしろIWCの活動を誤らせ、その権威を貶めているのは反捕鯨派の多数派締約国でありNGOなのである。そしてホルト自身、過去にこれら両方で代表を務めていた人物である。反捕鯨派の行動がどのようなものか、ハーバード大学の哲学教授であるチャールズ・グリスワルドが動物権運動に与えた説明はこれを見事に言い当てている。「…道徳的情熱はその非論理性ゆえに、急進主義に走ると反道徳的になる。」

日本鯨類研究所関連トピックス (1999年9月～11月)

当研究所評議員会・理事会の開催

9月22日当研究所会議室において、評議員会

及び理事会を開催し、平成11年度の事業計画と収支予算及び寄附行為の一部改正の件を中心に

審議され、原案どおり可決承認された。

SOWER計画会議の開催

9月27日から30日までの4日間、当研究所会議室において、IWC/SOWERの1999/2000年度調査計画会議が開催された。

バニスター前IWC科学委員会議長を始めとする海外からの6名の参加者や、調査船幹部を含め30余人の関係者が出席した。今年度はチリーのバルパライソ並びにプンタアレナスを基地にして、南極半島周辺の南極海域を調査することになっている。また、今調査航海は従来の鯨資源の解明を目的とするばかりでなく、一部はIWCとCCAMLRとの共同調査として運行されることになっている。

職員の採用

10月1日付で、調査部採集調査室研究員として茂越敏弘を採用した。

第6次北西太平洋鯨類捕獲調査副産物販売勉強会の開催

10月14日当研究所会議室において、流通関係業者、加工業者、消費者代表等の参加を得て、販売勉強会を開催した。

販売するミンク鯨肉製品は、公共性の高い副産物であるので公正な販売を行うこととし、鯨肉が国民各層に広く、適正な価格で公平に行き渡るよう申し合わせるとともに、引き続きイベントや即売会を通じて国民に捕鯨問題・鯨食文化等について理解と認識を深めるための一層の努力をお願いした。

第3回「人と鯨研究会」の開催

10月25日、当研究所会議室において、第3回人と鯨研究会が開催された。研究会では笹川平和財団主任研究員である伊勢崎賢治氏より「人間社会の“開発”という観点から、野生動物を考える」と題する話題提供を基にして、討議がなされた。なお、(社)自然資源保全協会企画部長の金子与止男氏、WWFジャパン自然保護室の小森繁樹氏が特別参加した。

当研究所の創立記念日

10月30日に当研究所の第12回目の創立記念日を迎え、10月29日に大隅理事長からの訓辞のあと赤飯で昼食会を開いた。

ミリンコビッチ博士講演会の開催

11月2日当研究所会議室において、DNA分析の専門家であるミリンコビッチ博士の来日を機に、種内集団構造と種間関係についての講演を依頼した。博士の当研究所における講演は2度目であるが、今回は分子データを使って、複数の集団を異なる種に分けるために用いられてきた手法についての解説であった。遠くは九州大学を始め本研究に関心を有する29名が受講した。

第13次南極海鯨類捕獲調査船団の出港

11月9日、調査母船日新丸、目視採集船勇新丸、第1京丸、第25利丸及び目視専門船第2共新丸の計5隻の南極海鯨類捕獲調査船団は、下関市あるかぼーと岸壁での下関市の絶大なご支援による当研究所主催の盛大な出港式のあと、調査海域へ向け出港した。

CITES・COP 11及びIWC 52対策戦略会議の開催

11月17日から19日まで海外漁業協力財団会議室において、海外からNGO外を招聘し、来年4月にケニアのナイロビで開催されるCITES会議及び来年6月にオーストラリアのアデレードで開催されるIWC年次会議に向けての対策を中心に討議した。

当研究所から大隅理事長はじめ、役職員11名が参加した。

IWMC(国際野生生物管理連盟)第2回持続的利用シンポジウムの開催

11月22日から26日まで中国の成都において、IWMCが主催するシンポジウムが開催され、41ヵ国から政府及び民間の関係者約110名が集まり当研究所からダン・グッドマンが参加した。

世界の資源保存と文化の維持にとって重要な諸問題及び生物種について集中的な討議が行われ、世界的規模でそれらの保存の努力を進めるための国際協力とコミュニケーションの必要性について合意が得られた。

大隅理事長が水産功績者に選ばれる

(社)大日本水産会の11年度水産功績者表彰式が11月25日、桂宮宜仁親王殿下のご臨席の下、三会堂ビル石垣記念ホールで開かれ、大隅理事長が水産功績者として栄えある表彰を受けた。

SOWER調査船の出港

IWC/SOWER、1999/2000年度調査航海に向けて、昭南丸と第2昭南丸が11月26日に瀬戸田港を出港した。両船の指向地はチリーのバルパライソであるが、ソノブイ等の調査資材の積込みのため、途中ホノルルを経由することになっている。バルパライソでは年明けに8名の国

際調査員が乗船して、約1.5ヶ月間南極半島周辺海域で調査を行ない、プンタレナスで調査員を下船させて、3月末に日本に戻る予定となっている。なお、調査支援を目的に、チリー出身のルイス・パステネ当研究所研究部長代理が事前にバルパライソに飛び、両船の出港準備に協力する。

当研究所評議員会・理事会の開催

11月26日当研究所会議室において評議員会及び理事会を開催し、平成10年度の事業報告並びに収支計算書について審議し、原案どおり可決承認された。

日本鯨類研究所関連出版物等 (1999年9月~11月)

[印刷物]

- 当研究所：BALEINES EN CONCURRENCE AVEC LES PECHEURS POUR LES RESSOURCES LIMITEES. 4pp. The Riches of the Sea/The Institute of Cetacean Research, 1999/9.
- 当研究所：Ballenas y Pescadores Compiten por Recursos Limitados. 4pp. The Riches of the Sea/Instituto de investigación de cetáceos, 1999/9.
- 当研究所：鯨研通信, 403. 24pp. 日本鯨類研究所, 1999/9.
- 当研究所：GESTION DES RESSOURCES EN CÉTACÉS Qu'est-ce que c'est que l'IWC?. 8pp. l'Agence des Pêches/l'Institut de Recherche des Cétacés, 1999/9.
- 当研究所：MANAGEMENT OF CETACEAN RESOURCES What is the IWC?. 8pp. the Fisheries Agency/the Institute of Cetacean Research, 1999/9.
- 当研究所：MANEJO DEL RECURSO CETÁCEOS ¿Qué es la IWC?. 8pp. la Agencia de Pesca/el Instituto de Investigación de Cetáceos, 1999/9.
- 当研究所：日本の沿岸で見られるイルカやクジラの見分け方。4pp. 全国漁業協同組合連合会、財団法人日本鯨類研究所、社団法人日本定置網漁業協会, 1999.
- 当研究所：QUE FAIRE FACE A LA CRISE ALIMENTAIRE DU 21EME SIECLE?. 3pp. The Riches of the Sea/The Institute of Cetacean Research, 1999/9.
- 当研究所：Qué Podemos Hacer Frente a la Crisis Alimentaria en el Siglo XXI?. 3pp. The Riches of the Sea/The Institute of Cetacean Research, 1999/9.
- 当研究所：水産資源管理談話会報, 20. 28pp. 日本鯨類研究所資源管理研究センター, 1999/9.
- 当研究所：Whaling and Anti-Whaling Movement 捕鯨及び反捕鯨運動。59pp. 財団法人日本鯨類研究所, 1999/3./1.
- Bannister, J.L., Pastene, L.A. and Burnell, S.R.:First record of movement of a southern right whale (*Eubalaena australis*) between warm water breeding grounds and the Antarctic ocean, South of 60° S. *Marine Mammal Science* 15(4):1337-1342, 1999/10.
- Corkeron, P.J., Ensor, P. and Matsuoka, K.:Observations of blue whales feeding in Antarctic waters. *Polar Biology*, 22(3):213-215, 1999/9.

- 石川 創：特別読物 ノルウェー捕鯨事情(1)。水産週報, 1500 : 4-7, 1999/10/25.
- 石川 創：特別読物 ノルウェー捕鯨事情(2)。水産週報, 1501 : 14-15, 1999/11/5・15.
- 石川 創：特別読物 ノルウェー捕鯨事情(3)。水産週報, 1502 : 23-26, 1999/11/25.
- 村上光由：新たな問題に挑戦していく。水産週報, 1495 : 3, 1999/9/5.
- 中尾真季、白木原国雄、白木原美紀、吉田英可：西九州沿岸海域におけるスナメリの分布と環境要因の関係。平成11年度日本水産学会秋季大会講演要旨集, 1999/10.
- 西脇茂利：何処か違う日本海のカマイルカ。セトケンニュースレター, 15 : 4, 1999/10/5.
- 大隅清治：異論、反論～読者から 8月号「巻頭随想」にもの申す。水産界, 1377 : 16, 1999/10/1.
- 大隅清治：新聞のコラムを担当する。沼声, 232 : 163, 1999/10/1.
- 大隅清治：インタビュー 近い将来捕鯨再開の予感 CITES結果に注目(財)日本鯨類研究所理事長大隅清治。みなと新聞, 1999/11/16.
- 大隅清治：(インタビュー)日本鯨類研究所理事長 大隅清治氏に聞く IWC、近く変革へ 調査の下地が大変重要。日刊水産経済新聞, 1999/11/22.
- Tamura, T. and Ohsumi, S. : Estimación sobre el consumo total de alimento por los cetáceos en los océanos del mundo. 16pp. The Institute of Cetacean Research, 1999/3.
- Tamura, T. and Ohsumi, S. : Estimation sur la consommation alimentaire totale par les cétacés dans les océans du monde. 16pp. The Institute of Cetacean Research, 1999/3.
- 田中昌一：南氷洋における鯨の保護区。鯨研通信, 403 : 1-5, 1999/9.
- Yoshida, H. and Kato, H. : Phylogenetic relationships of Bryde's whales in the Western North Pacific and adjacent waters inferred from mitochondrial DNA sequences. *Marine Mammal Science* 15(4) : 1269-1286, 1999/10.

[学会発表]

- Abe, H. and Goto, M.: The Application of Microsatellite DNA for Determining population Structure of Minke Whale. Central Bering Sea Pollock Stock Structure Workshop, National Research Institute of Fisheries Science, 1999/9.
- 茂越敏弘・鈴木孝敏・浅田正嗣・福井豊・石川 創・大隅清治：索餌期における南半球産ミンククジラの精巣機能。第92回日本繁殖生物学会大会, 仙台国際センター, 1999/9/28.
- 中尾真季・白木原国雄・白木原美紀・吉田英可：西九州沿岸海域におけるスナメリの分布と環境要因の関係。平成11年度日本水産学会秋季大会, 1999/9/28.
- 下川哲哉・西脇茂利・牧田登之・木曾康郎：ミンク鯨の唾液腺。第128回日本獣医学会学術集会, 1999/10/15.

[放送・講演]

- ゲットマン,D：基調講演「再び鯨に会う日」文明の対立を越えて。クジラ食文化を次代へ伝える集い, 札幌後楽園ホテル, 1999/9/22.
- 大隅清治：鯨と漁業との競合。松戸鯨食文化を守る会, 新松戸公民館, 1999/10/11.
- 大隅清治：これからの捕鯨。第4回九州極洋会, 博多全日空ホテル, 1999/10/22.
- 大隅清治：ハナゴンドウが木場に迷入する。フジテレビ スーパーニュース, 1999/11/23.
- 山村和夫：クジラの話。くじら料理を楽しむ会, 熊本ニュースカイホテル, 1999/9/9.
- 山村和夫：反捕鯨運動の盛衰。鯨友会定期総会, 日立因島労働会館, 1999/10/16.
- 山村和夫：鯨を獲る物語。東京水産大学海鷹祭, 1999/11/21.

[新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・ ニュースの周辺 独自に商業捕鯨継続するノルウェー 鯨研石川室長「学ぶべきところ多い」：日刊水産経済新聞 1999/9/3.
- ・ 9月9日“くじらの日”「くじら料理を楽しむ会」熊本の鯨問屋らが開催：みなと新聞 1999/9/21.
- ・ 玉澤農水相を表敬訪問 就任祝い、捕鯨関係者：みなと新聞 1999/10/8.
- ・ 玉澤大臣に施策支援要請 島氏ら捕鯨関係者：日刊水産経済新聞 1999/10/8.
- ・ 玉澤大臣を表敬訪問 島IWC代表ら「捕鯨問題の前進期待」：水産タイムス 1999/10/11.
- ・ 大隅鯨研理事長らに 大日本水産会 11年度水産功績者に49人：日刊水産経済新聞 1999/10/15.
- ・ 11月25日に99年度水産功績者表彰式 藤井浩、大隅清治氏ら49人 大日本水産会：みなと新聞 1999/10/15.
- ・ 平成11年度水産功績者 大隅清治氏（鯨研理事長）ら49名：日刊水産通信 1999/10/15.
- ・ 平成11年度水産功績者 大隅鯨研理事長、山本共水連専務ら49名に：水産タイムス 1999/10/18.
- ・ 量販店などに鯨肉敬遠の動き 築地卸、風評被害阻止へ：みなと新聞 1999/10/27.
- ・ クジラを求めて 調査船団 きょう南極海へ：朝日新聞 1999/11/9.
- ・ クジラに感謝して「商業捕鯨再開の原動力に」下関で供養祭：朝日新聞 1999/11/9.
- ・ 下関でくじら供養祭 南氷洋調査捕鯨出港を記念：山口新聞 1999/11/9.
- ・ きょう下関出港 南氷洋鯨類捕獲調査船団 日新丸など一斉に：みなと新聞 1999/11/9.
- ・ 南氷洋鯨類捕獲調査へきょう日新丸など出港：日刊水産通信 1999/11/9.
- ・ 南氷洋鯨類捕獲調査船団 下関から一斉出港：みなと新聞 1999/11/10.
- ・ 日新丸船団が出港 下関 南氷洋で鯨類調査：日刊水産経済新聞 1999/11/10.
- ・ IWC日本代表島一雄氏が退任：読売新聞 1999/11/12.
- ・ 漁船とミンククジラ サンマめぐり接近戦 北海道－三陸沖 年間6万～9万トン捕食：毎日新聞 1999/11/13.
- ・ IWC政府代表に 森本稔水産庁次長：みなと新聞 1999/11/15.
- ・ 9日、5隻が出港 南氷洋鯨類調査船団：水産タイムス 1999/11/15.
- ・ 鯨類研究所 きょうから販売 北西太平洋調査鯨肉298トン：みなと新聞 1999/11/15.
- ・ 鯨肉298トンを販売 市販用は115トン 日鯨研、北西太平洋調査分：日刊水産経済新聞 1999/11/15.
- ・ 島氏が退任、後任に森本次長 IWC政府代表：日刊水産経済新聞 1999/11/15.
- ・ 島一雄IWC政府代表が退任 後任に森本稔水産庁次長：日刊水産通信 1999/11/15.
- ・ 鯨肉卸価格を公表 すべて据え置きに 日本鯨類研究所：日刊水産通信 1999/11/16.
- ・ 第13次南氷洋鯨類捕獲調査船団が出港「日新丸」はじめ全船そろって下関から：みなと新聞 1999/11/16.
- ・ 第2回くじら供養祭 鯨の霊慰め、航海安全祈願：みなと新聞 1999/11/16.
- ・ 新旧IWC政府代表が会見「いじめの構図」の打破へ 反捕鯨運動は反環境運動：みなと新聞 1999/11/18.
- ・ IWCの新旧政府代表が会見 森本新代表 捕鯨再開めざし全力 島前代表理不尽な攻撃に戦い抜く必要：日刊水産通信 1999/11/19.
- ・ 反捕鯨の攻撃に屈するな 鯨類調査通じて捕鯨再開 IWC政府代表・顧問が会見：日刊水産経済新聞 1999/11/19.
- ・ 全国の市場で 鯨肉115トンを販売 日鯨研 刺身用赤肉がキロ3270円：水産タイムス 1999/11/22.
- ・ IWC代表に森本氏 島氏は政府顧問に就任：水産タイムス 1999/11/22.
- ・ 鯨類捕獲調査船団 日新丸が南氷洋へ出港：日刊水産経済新聞 1999/11/22.
- ・ IV区、III区東海域で標本採集 1999－2000年度南氷洋ミンククジラ捕獲調査計画概要：日刊水産経

済新聞 1999/11/22.

- ・水産功績者49人を表彰 大日本水産会：日刊水産経済新聞 1999/11/26.
- ・「クジラ水銀汚染」研究発表が波紋 漁1ヵ月以上中断：産経新聞 1999/11/27.
- ・鯨追い込み漁再開 「有害物質検出」学会発表で休業：読売新聞 1999/11/27.
- ・大日本水産会 水産功績者49人を表彰 大隅鯨研理事長、高山共同船舶相談役らが受賞：水産タイムス1999/11/29.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・新捕鯨構想を世界に提案 大隅鯨研理事長、今後の課題等語る：水産界 1999/9.
- ・北西太平洋ミンク鯨調査の成果公表：水産界 1999/9.
- ・鯨研、新理事に3氏就任：水産界 1999/9.
- ・第6次北西太平洋鯨類捕獲調査が終了：水産界 1999/9.
- ・第6次北西太平洋鯨類捕獲調査終了 ミンククジラ資源は健全：勇魚通信 1999/10.
- ・鯨と人間が魚を取り合う漫画 高木岑生・画：勇魚通信 1999/10.
- ・11年度水産功績者49名に 11月25日に表彰式典・祝賀会举行：水産界 1999/11/1.
- ・平成十一年度・大日本水産会・水産功績者 大隅清治氏（日本鯨類研究所理事長）ら四十九名：水産世界 1999/11/15.
- ・サンマ二十万トンを捕食 不漁はミンク鯨のエサが原因？：水産世界 1999/11/15.
- ・日新丸船団が下関から出港：水産週報 1999/11/25.

京きな魚（編集後記）

間もなく1999年が終わり、西暦は2000年代に突入です。ミレニアムと呼ぶそうですが、世紀末を暗いイメージにさせていたノストラダムスの予言から解放されたというのに、いまひとつ盛り上がり欠けているのはコンピューターの2000年問題のせいでしょうか。

11月9日に小学生100名を含む下関市民等700名が見送る中を勇躍南極海に向けて出港して行った日新丸船団ですが、やはりこの問題ではヒヤヒヤしながら正月を迎えることになりそうです。飛行機と違って船は浮いているので生命の危険はありませんが、現代の船は、コンピューターに制御された電気動いていると言っても過言ではありません。昨年の火災事故で日新丸は第2甲板の天井沿いの電線を焼失し、操舵室から機関をコントロール出来なくなったため、タグボートでニューカレドニアまで曳航されましたが、応急修理だけの目的で日本から送った電線の長さは8千メートルに達したそうです。調査で集めたデータの管理も、人工衛星を中継して行なう内地との連絡も全てコンピューター

依存の状態です。心配の種は尽きませんが、2000年問題が杞憂に終われば景気も元気も一気に上昇となるのではないのでしょうか。

ちょっと遅くなってしまいましたが、第5回 JARPN航海の結果を銭谷さんに纏めて貰いました。既に6回目が終了しておりますが、銭谷さんは6回中5回の調査航海に乗船しております。もうひとつの「反捕鯨主義のまやかしとその罪」は捕鯨問題の現状を皆様理解して頂く一助になればと考え掲載したものです。グッドマンと飯野の両君は情報・文化部に所属しておりますが、共に異色の経歴を持っております。グッドマンさんはカナダ漁業省に長く勤めてIWCその他の国際漁業会議を数多く経験しております。政府の役人を引退して日本人の奥様と一緒に戻って来た次第です。飯野君は京都大学法学部で助手をしていたことがある法律の専門家です。最近水産庁から頼まれてミナミマグロ訴訟問題の手伝いもしています。

よいお年をお迎えください。(山村和夫)

ストランディングレコード

No.	種名	評級	雌雄	地名	位置	年月日	状況	生死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-718	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	940420	混獲(大型定地網)	生存- 放流	1.45		大谷誠司	日本鯨類研究所			15.30発見
0-719	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	940506	混獲(大型定地網)	生存- 放流	1.60	未成熟	大谷誠司	日本鯨類研究所			放流後制網で混獲死。剖検。
0-720	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	950522	混獲(大型定地網)	生存- 放流	1.55		大谷誠司	日本鯨類研究所			
0-721	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	950612	混獲(大型定地網)	死亡	1.62		大谷誠司	日本鯨類研究所			
P-046	コウワツナ	B	1	秋田	南秋田郡八郎潟町八郎湖	951200	混獲	死亡	1.20		山田格	国立海洋博物館	新聞記事(秋田魁990601)		解体
M-168	ニギツナ	B	1	宮崎	東臼杵郡北浦町	951214	混獲(定地網)	死亡			栗田淳男	宮崎県水産試験場			
P-047	コウワツナ	B	1	秋田	本荘市松ヶ崎漁港	960100	迷入	生存			山田格	国立海洋博物館	新聞記事(秋田魁990601)		
0-722	オオミズカ	B	2	北海道	茅部町情茅部町白尻	960400	混獲(大型定地網)	生存- 放流			大谷誠司	日本鯨類研究所			960406-0408の間に混獲
0-723	オオミズカ	B	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	960409	混獲(大型定地網)	生存- 放流			大谷誠司	日本鯨類研究所			
0-724	オオミズカ	A	2	北海道	茅部町情茅部町白尻	960410	混獲(大型定地網)	生存- 放流	1.47	M:141/ F:143 cm	大谷誠司	日本鯨類研究所			
0-753	スズノカ	B	1	宮崎	延岡市新成町	960412	漂着	死亡			栗田淳男	宮崎県水産試験場	宮崎日日新聞		小樽水産館公社で保蔵
0-725	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町白尻	960417	混獲(大型定地網)	生存- 飼育	1.25		大谷誠司	日本鯨類研究所			
0-726	オオミズカ	A	4	北海道	茅部町情茅部町白尻	960428	混獲(大型定地網)	生存- 飼育2 死亡1 放流1	1.19	M:119-128-13 7/ F:120cm	大谷誠司	日本鯨類研究所			1頭(雄119cm)は輸送中死亡。剖検。2頭は小樽水産館公社で保蔵。
0-727	オオミズカ	A	1	北海道	茅部町情茅部町大船	960530	混獲(大型定地網)	生存- 放流	1.50		大谷誠司	日本鯨類研究所			

No.	種名	採	数	性	種	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-728	ネズミイカ	A	2		北海道	茅部郡南茅部町白 尻	970417	混獲(大 型定地 網)	生存→ 逃走				大谷誠司	日本鯨類研 究所			自力で脱出。
0-729	ネズミイカ	A	2	1	北海道	茅部郡南茅部町白 尻	970421	混獲(大 型定地 網)	生存→ 放流1 死亡1	1.45 M,不明/F:145 cm		大谷誠司	日本鯨類研 究所			1頭(雄)は輸送中に死亡。	
0-730	ネズミイカ	A	1		北海道	茅部郡南茅部町白 尻	970428	混獲(大 型定地 網)	死亡			大谷誠司	日本鯨類研 究所				
0-731	ネズミイカ	A	2	1	北海道	茅部郡南茅部町白 尻	970430	混獲(大 型定地 網)	生存→ 放流1 死亡1	1.24 M,不明/F:124 cm		大谷誠司	日本鯨類研 究所			1頭(雄)は輸送中に死亡。	
0-714	ハクオンイカ	B	1		熊本	天草郡若北町	970500	漁獲	死亡	2.60	吻頭部-腹部 にヒニール袋充 満	山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(服 本日99070 5)		青島(青洋高校) 後に取り返したところヒニール袋を発見。	
0-715	マガライイカ	B	1		沖縄	那覇市那覇港	971000	港内流入	生存→ 阿胃	1.94	体重54kg。前 後死亡、胃内 にヒニール充 満	山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(沖 縄7/14:99071 1)		国営沖縄記念公園水族館が保護したが 2日後死亡。ヒニール袋のため解剖不能 になったと推定	
0-697	イカイ	B	1		山口	下関市豊浦村岩坪 地先 岩場	980526	漁獲	死亡		体長約1m。部 乱	菊池祐二	下関市立下 関水族館	港警局			ヒニール袋で詰められ、不明な理由による。理 由不明
P-051	イカイ	A	1		福井	丹生郡越前町湯浦	990330	漁獲	生存→ 阿胃→ 放流	1.50	推定年齢 3-4歳。放流 時体重約90kg	山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(福 井990608)			越前松島水族館で保護。990607県漁業 取締船で三国沖30kmに放流。
0-705	オカキハクオンイカ	A	1		新潟	西津市白瀬漁港北 300m(佐渡島)	990406	漁獲	死亡			野田宗吉					
0-691	コウゴクイカ	B	1		茨城	日立市国分町2/八 反原海岸	990415	漁獲	死亡	3.18		山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(福 井990608)			茨城県水産部が調査 NH-1-00176(A),D NA・環境分析標 本(国立科博)、 船取(日鯨研)
EX3048	シゴクイカ	A	1		沖縄	名護市嘉陽沖5km	990420	目視情報	生存			山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(沖 縄7/14:99042 1)			10:00AM新聞社へ「オカキ」から登録

No.	種名	群数	雌雄	地名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-683	ヌズリ	B	1	三重	津市白旗町向坐町 船浦海岸(伊勢湾)	990509	漂着	死亡		後軀欠落、残 部体長40cm、 腐敗	吉岡基	三重大学生 物質源学部	無し	無し	5月未収発見、990608調査、埋却。
0-681	種不明イカ	D	1	石川	金沢市本野町金沢 港	990504	港内迷入	生存			山田浩	国立科学博 物館	新聞情報(北 陸中日99050 4)	無し	4月下旬に港内に入り込んだイカの群れの1頭が届けられた。
0-680	オキハシノコ	A	1	秋田	男鹿市男鹿中浜間 口	990505	漂着	死亡	4.85	非妊娠、詳細 乳頭線あり	柴田理/石川善秀	日本海中部 シ-研究ケル	第一発見者; 杉本雄子	胎皮(甲殻研、予 定)	7:50AM発見、990505報告者が調査、埋却、他報告者;山田浩(国立科学博)新聞記事(秋田朝日990507) 弘花海洋水産科学館で保護、ハセガシ後放流予定。
P-046	ユウアアサリ	B	1	北海道	浦臼郡浦臼町赤伏 漁港	990512	港内迷入	生存→ 同着		体重11.3kg、 哺乳個体、生 後1ヶ月程度	山田浩	国立科学博 物館	新聞情報(十 勝毎日99052 8)		
P-045	オキハシ	A	1	秋田	由利郡西田町西口 漁港南	990514	漂着	死亡	1.80		柴田理	日本海中部 シ-研究ケル	第一発見者; 今藤一男		海岸に埋却
0-690	ヌズリ	B	1	茨城	鹿島郡廻村上釜	990518	漂着	死亡	1.82		田島水綿 子/塚野 みちる	国立科学博 物館	茨城県立博物 館	骨格(茨城県博 NM-1-001763)、D NA-環境分析標 本(国立科学博)、 脂皮(日鯨研)	報告より約2週間前に漂着、990525国立科学博・茨城県博・大洗水族館らで調査。
P-049	セニガキアサリ	B	1	北海道	根室郡及び礼 部町	990519	漂着	生存→ 同着		体重14.1kg、 生後1週間程 程度	山田浩	国立科学博 物館	新聞情報(十 勝毎日99052 8)		弘花海洋水産科学館で保護、ハセガシ後放流予定。
0-673	マカライカ	C	1	沖縄	八重山郡竹富町西 表島船浦湾(西表 島)	990522	漂着	生存→ 死亡	1.32	詳細詳細値あり、 胸臈、尾臈、 生殖器に傷あり	中西希/ 松本千枝 子/伊香 玄	琉球大/西 表野生生物 保護センター/ 環境庁	無し	無し	満潮時に湾奥まで迷入し産卵、救助活動を行ったが死亡。埋却、他報告者;山田浩(国立科学博)、新聞記事(琉球990605)。
0-700	カマイカ	B	1	秋田	由利郡金浦町鷲 岩場	990522	漂着	死亡		胸臈欠陥、尾 生殖器は切断欠 如、切断部主 で体長2.05 cm	柴田理	日本海中部 シ-研究ケル	無し	無し	現地沖合には数千頭のイカ(種未確認)が漂泳、放置。
0-674	イシイカ(シイカ型)	A	1	北海道	網走市網走川河口	990523	漂着	死亡	1.02	体重14.4kg、 詳細詳細値あり、 体側、体腹 に外傷あり。	宇仁義和 氏/博物館	斜里町立知 床博物館	第一報告者; 鈴木淳志(東 京農大)	血液(東京農大 生物産産学部)、 全身冷凍(知床 博物館、国立科 博)	10:00AM発見、国立科学博へ移送後到着。

No.	種名	性別	種	地名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
P-050	コマヅクサウ	B	1	北海道	襟似郡襟似町	990525	漂着	生存→ 飼育		体重12.9kg 離乳個体、生後1ヶ月程度	山田格	国立科学博物館	新聞情報(十勝毎日990528)		苫田海洋水産科学館で採獲、少ヒリ後放流予定。
0-675	オホホクサウ	B	1	鳥取	気高郡若谷町若谷港	990528	漂着	死亡	4.73	詳細計測値あり、歯にスクリヤが付着、右体側にスクリヤ一痕あり。	安藤重敏	鳥取県立博物館	第一発見者：恒松進男/金崎安之助	骨格、肝、腎、精巣、腸、血液、肺から水銀を抽出。他報告者：小笠原淳子、吉岡基(三重大)、山田格(国立科学館)、新聞記事(山陰中央/日本報990529、日本工業990511、共同通信ニッポン速報990701、日本報990702)、文献(244)	6:00AM発見、鳥取大学で剖検後後送。肺から水銀を抽出。他報告者：小笠原淳子、吉岡基(三重大)、山田格(国立科学館)、新聞記事(山陰中央/日本報990529、日本工業990511、共同通信ニッポン速報990701、日本報990702)、文献(244)
0-670	オナリ	B	1	千葉	海上郡飯岡町赤園海水浴場	990529	漂着	死亡	1.76	胎位、胃内容無し	川浪絵美	フエラエクスプレス		骨格(重大水産生理学講座)、腸皮(三重大)	990530東京大学秋山氏らが調査。他報告者：伊藤孝彦(生物情報も)。
0-676	オナリ	B	1	愛知	知多郡南知多町豊成西之平井34(伊勢湾)	990529	漂着	死亡	1.78	初期階段、詳細計測値あり。妊娠、胎子長83.5cm。	駒嶋昌幸/大池隆也	南知多ビーチランド	第一発見者：磯部達恵	(母子ともに)腸皮、胎、腎(袋腫大)、腸皮(三重大)、頭骨、胃内容(ヒナ仔小)	990530ヒナ仔で剖検、埋却。
0-677	オナリ	B	1	愛知	知多郡美浜町上野間漁港北100m(伊勢湾)	990529	漂着	死亡	1.59	詳細計測値あり。	駒嶋昌幸	南知多ビーチランド	第一発見者：鈴木修平	胎皮、胎、腎(袋腫大)、腸皮(三重大)、皮下、骨格、上肢帯筋	埋却。
0-682	種不明イカ	B	1	青森	北津軽郡市浦村磯松	990529	漂着	死亡	1.20	尾鰭欠損。一部白骨化。	古川政幸	国立科学博物館	国立科学博物館博士藤由		9:00AM発見、埋却。
0-671	オホホクサウ	A	1	北海道	函館市広野町大森海岸(津軽海峡)	990530	漂着	死亡		右体側に数条の大きな傷痕を認め、(スクリヤ痕?)	勝山香峰	函館新聞		胎皮(日鯨研)、頭部(国立科学館)	4:30AM発見。他報告者：星野広志(北大津研)、伴良、橋本七。新聞記事(函館990530)、日鯨研DNA鑑定で種判定(後藤 隆夫)。
0-709	オナリ	A	1	山口	熊毛郡上関町祝島津	990530	漂流	生存→ 死亡	1.10	体重23kg。引上げ後間もなく死亡。	山田格	国立科学博物館	新聞情報(読売990501、中日990510)	宮島水産第一国立科学館	原産計画地沖合3km。
0-710	オナリ	B	1	山口	徳山市大津島	990600	漂着	死亡			山田格	国立科学博物館	新聞情報(中日990510)	宮島水産第一国立科学館	
0-685	イノイカ	A	1	北海道	利尻郡利尻富士町本泊港(利尻島)	990600	漂着	死亡	1.78	白骨化	佐藤肇彦	利尻町立博物館	第一発見者：坂本里恵/小松和恵	骨格(利尻町立博物館)	報告者観察日990630

No.	種名	種数	雌雄	地名	位置	年月日	状況	生ノ死	体長	生物情報	報告者	所属	積戻源	標本	備考
M-163	シツノク	B	1	北海道	根室市北浜町1(伊 重湾)	890602	漂着	死亡	7.10	高収頭著。	近藤誠久	根室市郷土 史料保存会		脂皮(日録研)	埋却。
O-678	スナリ	B	1	愛知	知多郡南知多町山 海海水浴場十一寄 前(伊勢湾)	990602	漂着	死亡	0.80	詳細計測値あり。	大池辰也 /駒嶋昌 幸	南知多ビ ンダー	第一発見者; 小坂泰典/高 藤麗菜	脂皮・筋・肝・腎 (愛媛大)、脂皮 (三重大)、全身 (10MF or ビニ フ)	
O-672	オウギハシラ	A	1	北海道	函館市浅亀沢(津 軽海峡)	990603	漂着	死亡		体長約5m、鱗 争痕あり。	内田友 み	函館新聞		脂皮(日録研)	他報告者:荒木英世(函館市水産課、標 本・写真)、石川相(日録研)、新聞記事 (酒類990603)、海上投棄、日録研DNA鑑 定で種判定(後藤健夫)。
O-679	スナリ	B	1	愛知	知多郡美浜町野間 岬灯台北200m(伊 勢湾)	990604	漂着	死亡		詳細計測値あり。 高収頭著、 尾鱗欠損、欠 損部まで155c m、胃内容コソ ロ。	駒嶋昌幸	南知多ビ ンダー	第一発見者; 吉村純夫	脂皮・筋(愛媛 大)、脂皮(三重 大)、頭骨・筋・胃 内容化(ナカホ)	埋却。
M-165	シツノク	B	1	新潟	新潟市五十嵐2の 町五十嵐浜	990604	漂着	死亡	3.23	高収頭著。詳 細計測値あり。	加藤浩彦 /進藤順 治	ツシビ7日 本海	第一発見者; 渡辺一秋	脂皮(日録研)、 国立科学博物館	990604国立科博に移送して剖検。
O-684	スナリ	B	1	愛知	西尾郡田原町大草 浜	990606	漂着	死亡		白骨化、体長 約180cm。	大池辰也 /駒嶋昌 幸	南知多ビ ンダー	第一発見者; 加藤弘	右下顎(ビ ン)	埋却。
O-688	スナリ	B	1	山口	T関市豊浦村豊 地先	990607	漂着	死亡	0.76	体重4.5kg。 体色黒色化。 鱗帯あり。	立川利幸	下関市立下 関水族館	全身冷凍、DNA鑑 本(国立科博)		
M-164	シツノク	A	1	北海道	苫小牧市学勇弘	990608	漂着	死亡	5.60	詳細計測値あり。 上顎欠損、高 収頭著。詳細 計測値一部あり。	堀川俊彦 /力山義 雄	苫小牧市農 業水産課	脂皮(日録研)、 国立科学博物館	990610国立科博に移送して剖検、日録 研職員参加、新聞記事(北海道/苫小牧 民報990609)。	
O-686	スナリ	A	1	愛知	知多市北浜町23知 多火力発電所放水 路(伊勢湾)	990608	漂着	死亡	1.63	高収頭著。詳細 計測値一部あり。	藤下雅章	中部防災	名古屋港水産 館蔵由	無し	他報告者:大池辰也(南知多ビ ンダー)
O-716	マコカクシ	B	1	和歌山	東牟婁郡太地町沖 約10km	990608	漂流	死亡		体長約8m、頭 部に衝突痕あり。	山田裕	国立科学博 物館	新聞情報(日 刊水産-79907 02、紀伊民報9 90703)		発見した漁業者が那智郡湯浦町平久井漁 港に陸揚げ、串本町で解体して売却。

No.	種名	評級	雌雄	産名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	埋却	備考
0-685	オナジ	B	1	三重	鈴鹿市南若松町千代崎海岸(伊勢湾)	990609	漂着	死亡	1.78	腐敗、腸露出	吉岡基	三重大学生 物資部		腸皮、筋、骨(三重大)	埋却	
EX-049	オナジ	0	1	和歌山	和歌山県東牟婁郡太地町沖10-157号、3323'N, 136°06'E	990609	目視情報	生存			磯根義	磯丸船廠	第1種丸	無し		水温22.3℃。周辺海域でマコソウ、ハナコソウ、マガキイカ、サコソウ、ベッコウイカを確認。他報告者:法花正志
0-687	オナジ	B	1	千葉	鴨川市橋立(コス)	990611	漂着	生存	1.95	体長約1.8m 外傷なし	海防隊 課	鴨川シ-ウ-4		無し		5:00AM砂浜に漂着を発見。約15時間後自力で遊泳し沖へ戻った。
0-689	オナジ	0	1	新潟	新潟県山北町中浜	990611	漂着	死亡		詳細計測値あり	加藤浩彦	マコソウ		無し		マコソウ7日本船が990612調査。山北町役場へ埋却
0-689	オナジ	B	1	三重	安芸郡阿賀町影重地先(豊津浦)(伊勢湾)	990616	漂着	死亡		腐敗、幼体、尾椎途中より後部欠損、大相部まで体長65cm	吉岡基	三重大学生 物資部	第一発見者; 富田靖男(環境保全事業団)	腸皮、筋(三重大)	埋却	
0-701	オナジ	B	1	愛知	知多郡南知多町日間賀島東港(三河湾)	990616	漂着	死亡	0.72	腐敗初期	大池区也 /和田恵	南知多シ-ウ-1 マコソウ		腸皮、筋、肝、腎(愛媛大)、腸皮(三重大)、下顎骨(化一方大)	埋却	
0-683	オナジ	B	1	千葉	銚子市富ヶ浜	990618	漂着	死亡	2.07	詳細計測値あり。胃内容物多数	宮内孝雄	銚子海洋研究所		頭部、胃内容、腸皮、肝、腎(国立科博)、骨格(海洋研究所)		6/17に海岸近くを葉羽遊泳。翌9:15AM発見。16:30より剖検。6/21埋却。他報告者:吉岡基(三重大)、山田佑(国立科博)。新聞記事(読売新聞ニ-2速報990618、千葉日報990619)。
0-688	オナジ	B	1	山形	西田川郡温厚町米子岩場	990620	漂着	生存→死亡	4.38	体重1006kg。胃内容物少量、胃と胃に線虫寄生。詳細計測値あり。	長瀬一雄	山形県立博物館		骨格(県博)、各種臓器標本(国立科博他)		17:00発見。救出を試みましたが死亡。990621県博が調査し、0622国立科博らと埋却で剖検。
0-692	オナジ	B	1	千葉	銚子市長崎町	990622	漂着	死亡		死後1ヶ月程。腐敗過激	宮内孝雄	銚子海洋研究所		無し		16:00発見。県銚子水産事務所、市役所水産課により埋却
0-696	オナジ	A	1	北海道	釧路市釧路町南浜町海岸	990622	漂着	死亡	5.07	歯の萌出無し。疑わしい。一部計測値あり。	宇仁義和	釧路市立知床博物館		腸皮、筋(日鯨研/国立科博)		12:00発見。尾鰭に漁業用ロープが絡まれている。脱着後放棄された可能性あり。埋却。日鯨研DNA鑑定で種判定(後添付表)。